魔法少女リリカルなのは～銀色の戦士～

柊拓也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 銀色の戦士

【Nコード】

N2241K

【作者名】

柊拓也

【あらすじ】

自称「普通の高校生」の朝倉淳はある日アルハザードで作られたデバイスを拾う。そして彼を取り巻く環境は一変していく。ジュエルシードをめぐる2人の魔法少女の争いや、危険なロストロギアの暴走、ハチャメチャ&シリアスな魔法少女リリカルなのは 銀色の戦士 が始まります！

「プロローグ」（前書き）

このジャンルでは初めましての柊拓也です。

小説の投稿が久しぶりであれどうやったっけ？なんて考えながら投稿してます。

この作品のコンセプトは2人の主人公と3つの世界（第97管理外世界・ミットチルダ・アルハザード）を舞台にした八チャメチャ&シリアスな作品。
という感じですね。

それでは魔法少女リリカルなのは〜銀色の戦士〜始まります！

「プロローグ」

普通の高校生が、ある日突然、魔法を使えるようになった。本人はさほど嬉しいという感情はないらしい。

それはある日の通学途中、

主人公の朝倉 淳は他の生徒よりの若干早く通学する。

理由は家と学校までの距離である。

彼の家からはかなり遠いのだ。

今日も普通の一日が始まると思っていた。

それは通学路を半分行ったところだったろうか、いつも弁当調達のためにやるコンビニでのことだった。

弁当を買って出てきた淳は自分のバイクのハンドルに何かがぶら下がっていることに気がつく。

それはペンダントとダークグリーンの宝石。

何だろうと思いき宝石に触れてみた。

何でもなかったのだの宝石だと思った。

その時だった

「あつっ！」

今までただ、冷たいだけだった石が、突然熱を持ったのだそれは思わず声を上げるほどだった。

まるで真つ赤に焼けた鉄の塊を握っているような感覚だった。

淳は思わず石を手放した。

コンと軽い音を立てて地面に落ちる宝石。

そして、その地面に落ちた宝石を見て、淳はぎょっとした。

宝石が、太陽の反射光とはまるで異質の、紫色のオーラにもた光を放っていたのだ。

光のオーラはゆるゆると宝石の周りを漂う。

そしてダークグリーンの光が淳を包んでいった。

「マスター認証、朝倉IIベルリネット・淳」

淳はこのフレーズに聞き覚えがあった。

スーパーブラックバード

「名称登録、SuperBlackBird」

「名称を登録しています・・・登録完了、テストとしてセットアップしてみてください」

淳はいつの間にかスーパーブラックバードを拾い上げていた

「スーパーブラックバードセットアップ！」

「プロローグ」(後書き)

プロローグが終了しました。

なんか久々のなのは小説ですね。

公開していない作品(要するに途中で投げたした)を含めて良い物を作るのにいったいどれだけ時間食ってるんだろうみたいな感じですよ。

今回は第1話「二人の少女とユエルシード」です。

やっと次回からは原作キャラ登場の予定。

御意見ご感想をお待ちしています。

第1話「二人の少女とジュエルシード 前編」(前書き)

淳「で言い訳は？」

作者「いや・・・忙しかったんです」

淳「それだけかい！」

作者「しかも意外と長くなったので前編後編で急遽分けることにしました」

淳「全く無計画だな、さて、気をとり無いして魔法少女リリカルなのは、銀色の戦士」第1話「二人の少女とジュエルシード 前編」
始まります！」

第1話「二人の少女とジュエルシード 前編」

プロローグから数日後

「いつてきまーす」

淳はヘルメットを片手に玄関を出る。

「気をつけて行ってくるのよー」

後ろから姉の声が聞こえてくる。

そう、慌ただしい日常が戻って来ていた。

ただし、いつも以上に忙しくなっていた。

学校の授業に加えて、ブラックバードと共に始めた訓練（剣術）をやっているからだ。

1つの転機はそんな生活にも慣れ始めた頃のことだった。

ところ変わってここはL級次元航行艦アースラ。

ジュエルシードを巡る事件の捜査の進展の報告を艦長室で聞いていた艦長、リンディ・ハラオウンは1つ大きな懸案事項を抱えていた。それは数日前から起きている第3勢力による介入だ。

何者かの手によって急速にジュエルシードが回収されつつあるという物だ。

一晩につき一個、ジュエルシードが回収されていた。

リンディは部下の報告が終わった後運良く撮影に成功した動画を再生していた。

そこに映し出されていたのは、魔導師だった。

左手にデバイスを持ち、銀髪の長い髪に、赤い瞳、そしてバリアージャケットは赤と銀の革ツナギ（プロライダーがレースの時に着ているツナギ）にジャケットの少女だった。

日常の生での出会いは非日常の中での出会いよりも鮮明に残りにくい物だが、時にしっかりと覚えている物もある。

これはそんな一コマ

淳は学校に向かうためにNSRを走らせていた。通学時間は平均して2時間弱、公共交通機関を使っても3時間半かかる。

もちろん新幹線など通ってはいない、全く不便だと淳は感じている。ただ、その分始業時間の遅い学校を選んだことも事実である。

ふと、淳は公園でNSRを止めた。

「What went wrong? Master(どうかしましたか?マスター)」
ブラックバードが聞く

「いやちよっと・・・悲痛な叫びか聞こえたような気が・・・」
淳はエンジンを切り、声のした方に走っていった。

ガサガサと木と木の間を走り抜けていく。

しばらく走ると開けた場所に一本の木があった。
木の下に誰かいるようだ。

そこにはうずくまる少女とそれに寄り添っているもう一人の少女がいた。

「どうしたの?」

うずくまっている少女は顔色が悪く、衰弱していた。

「あんたは?」

寄り添っていた少女が突然現れた淳に対し不審な目を向ける。

その時淳の目もつと別のところに行っていた

「おい、これなんだよ」

と落ちているペンのような物を拾い上げる。

「それは・・・栄養剤だと思う」

淳が手にしているペンのような物はペン型の注入器(注射器)だった。

「インスリンで・・・朝飯はいつ食った?」

どうやら低血糖らしい。

「いつって・・・食べてない」

食事を抜いてインスリンを打てば低血糖にもなる

「インスリンショック療法じゃあるまいし・・・」

ポーランドの精神医学者マンフレート・ザーケルにより、インスリンを大量投与することにより低血糖ショックを人為的に起こさせて精神病患者を治療するというインスリンショック療法（Insulin shock therapy）が考案されたが、死亡例が多く、1950年代には廃れた。

「それって何なの？」

「どうやら全く分かっていないようだ。」

「インスリンは、1型糖尿病における薬物療法、糖尿病は血糖値が高くなる病気。血糖値は、血液内のブドウ糖の濃度。それが低くなるというんなところに悪影響が出て最悪死ぬ」

自分のバッグの中を漁っている淳。

「それって・・・」

やっと気がついたらしい

「あった、これを半分が良いから飲ませろ」

と取り出したのは500ccのペットボトルに入ったオレンジジュースだった。

「これってジュース？」

何故ジュースなのは分らないらしい

「ホントは砂糖かブドウ糖を歯茎と唇の間に擦り込むほうが良いんだけど、しょうがないからそのまませて」

そう言って淳は携帯をとりだした。

素早く自宅の電話をプッシュして電話をかける。

「あ、姉さん、ちょっと良いかな」

まだ出勤前で家にいた姉の朝倉美雪が電話に出た。

「どうしたの？なんかあった？」

いつもなら何も言っただけで済むはずの弟が電話をかけてきたために少々心配らしい。

「実は……」

事情を説明し車で迎えに来てもらうことに
電話を切り携帯をしまう

「ねえ、飲ませたけど、いいよ、あんたは行っても
どうやら電話の内容を聞かれていたらしい。」

「病人放って行くわけにもいかねーよ、それにもう手遅れだ」
「ここは淳の家から徒歩5分のところにある公園の中なのだ。」

「え？」

淳の姉の愛車の水平対向エンジンのエンジン音が聞こえてきた。
淳は少女を抱えて立ち上がる。

「あ！そうだ、名前は？」

今更のように聞く淳

「あたしはアルフ、あんたが抱えてるのがフェイトだよ」
ぶっきらぼうにアルフは言う

淳は二人を連れて姉の元に向かった。

第1話「二人の少女とジュエルシード 前編」(後書き)

どうもやっと1話目ですね・・・地獄だった・・・まあ地獄だったのは個人的な用事の方なんですけどね
次回は「2人の少女とジュエルシード 後編」です。

第2話「二人の少女とジュエルシード 後編」(前書き)

ども、更新ペースが遅いことに定評のある柊拓也です。

慌ただしかった2月も終わってしまいました。

3月になり余裕が出てきたので3話目の投稿です。

それでは魔法少女リリカルなのは〜銀色の戦士〜が始まります。

第2話「二人の少女とジュエルシード 後編」

フェイトを淳の姉、朝倉美雪の部屋のベットに寝かせた。

淳は姉にせかされてとうに学校に向かわされていた。

姉の美雪は大学生で現在はデザイン科の4年生だ。

「さてと、今日は休講だし、やることなく困ってたんだ」

活発で何かやることがないとどうも落ち着かない美雪は弟が少女を連れ込んだこと全く気にしていないようだ。

それどころかやることができたとニコニコしている。

「悪いね、せつかくの休日だったんだろ？」

アルフがフェイトを心配そうに見つめながら美雪に聞く。

「私は別に気にしてないよ、やることって言ったらS203かVR

-4をいじるくらいだしね」

ニコニコほほえむ美雪にアルフは笑うしかなかった。

ところ変わって淳はと言うと……。

部活帰りの放課後に図書館巡りをしていた。

おもしろそうな本を見つけては借りて読むのが淳の日課だった。

友人からは「剣道部の後によく本なんて……」と言われるほどだった。

今日も何かおもしろい本はないか探しに来ていた。

天井までびっしりと本棚を埋め尽くす本。

無限書庫を思わせる図書館だが、実はすべてある一人の大富豪の持ち物なのだそうだ。

職員から何から何まですべてその人のポケットマネーから出ているらしい。

まあ、地域の活性化のためにかなり尽力している人らしい。

という看板を通り過ぎ、参考書のコーナーを通り抜けようとしたときだった。

ドン！

角を曲がって出会い頭に衝突してしまった。

尻餅をついてしまった淳の上に大量の本が落ちてきた。

「いててて……」

ぶつかってしまった方を確認する

「いったーい……」

女の子だった。

年は7歳から13歳前後、

「大丈夫？」

淳はその女の子の手をつかみ立ち上がらせる。

「すみません、私の不注意でした」

本を集めながら謝る少女

「謝らなくても平気だよ」

むしろこっちがぶつかってしまったと思っている淳

「ありがとうございます」

そういつて少女は貸し出しカウンターの方へ走っていった。

淳はそのまま目星の本を見つけ貸し出しカウンターに来た。

そこには困った顔をしたさっきの少女が居た

「あれ？どうしたの？」

暗い顔の少女に淳が話しかける

「貸し出しカードをなくしてしまって……」

どうやら貸し出しカードをなくしてしまったようだ。

「そっか……」

そついいながら制服のポケットに入れている財布を取り出した淳

「あれ？」

ポケットの中になにやらカードが入っていた。

貸し出しカードだった

名前の欄には「高町なのは」の名前が。

そのカードを見た淳は

「もしかして、君の？」

と少女に見せた。

「え？・・・あ！はい！！！」

暗かった顔が一気に明るくなった。

「さっきぶつかったときにポケットの中に紛れ込んだみたいだね」

あははと笑いあい

「えーっと、高町なのはです」

自己紹介をしていた

「朝倉淳です」

それじゃねと挨拶を交わしそれぞれの帰路についた。

「ただいま」

午後6時過ぎに淳が帰宅

昼頃には意識が戻りフェイトとアルフは帰宅したと聞かされた。

「釘さしといたから平気だよ」

もしもう一回なるのではないかと危惧する淳に美雪は言った。

午後11時24分

それまでねていた淳が起き上がりフラフラと窓の方へ歩いて行く。

窓を開けそのままベランダに出る

その瞬間に淳の姿は一変していた。

左手にデバイスを持ち、銀髪の長い髪に、赤い瞳、そしてバリアージャケットは赤と銀の革ツナギ（プロライダーがレースの時に着ているツナギ）にジャケットの少女に変わっていたのだ。

続く

第2話「二人の少女とジュエルシード 後編」(後書き)

作者「第3話終わりました！」

淳「バカっぽいからそういうのやめた方が良くと思うぞ」

作者「そだね」

淳「まさかの展開だよな」

作者「そりゃあね最初に2人の主人公って言うてるもんね」

淳「まさか原作ヒロインが準主役とは・・・原作レプだね」

作者「いいのいいの、だってA、S編に入らないと2人目の主人公は出てこないしね」

淳「へー、ネタバレもしてるのかよ」

作者「さて次回は、「激突!?!3人の魔法少女」だ!!」

淳「逃げたな」

第3話「激突！？3人の魔法少女！」（前書き）

はい、やっと第3話目です。

言い訳ですよ、ありますよ

この小説を入れたUSBメモリを紛失していましたw
と言うわけで見つかったので投稿です。

次回からはもっと早く投稿出来るように頑張ります。

第3話「激突!?! 3人の魔法少女!」

闇に包まれた午前1時半

オフィス街にある高層ビルの屋上に一人の少女が立っていた。

彼女は両手を天高くかかげる。

彼女の手から黒く輝く光と白く輝く2つの光が夜空に放たれる。

2つの光は互いに絡み合いながら大きな円を描く

そして彼女を中心に半径500メートルを結界で覆った。

それまで閉じていた目を開き、悲しそうに天を仰ぐとその少女はミットチルダ式ともベルカ式ともつかない魔方陣を形成する

「Io raggruppoper lamia causa
il pottereché? andato fuori
in oscurità? dorme un sonno e
terno (闇に消えた力よ私の元に集いそして永遠の眠りにつき
なさい)」

アルハザードの言葉・・・現在では失われ使える者はいないはずの言葉を少女はすらすらと発音していく。
まるでそれは母国語であるかのように。

そしてその声に引かれるように2つのジュエルシードが高く掲げられた彼女の手の中に収まる。

そして一瞬だけ光が強くなるとジュエルシードは跡形もなく消えていた。

そして少女は悲しそうに天を仰ぐと転送魔法を発動させて、何処かへ消えてしまった。

翌日の午後

二人の魔法少女がジュエルシールドをかけて激突していた

・・・その時ジュエルシールドを回収していた第3者こと謎の少女は
というと

二人の激突をただ見つめていた

「・・・」

その少女は無言のままずっと二人の戦いを見つめている
特に高度な術を使うために魔力を集中させているわけでもなし、た
だ・・・涙を流しながら・・・。

彼女の目には悲しみがあつた。

しかし、その悲しみを知るのは彼女のみなのだ。

涙を隠し、デバイスをセットアップする少女

バリアージャケットが展開されその悲しみに満ちた目を隠すように
HMDゴーグルが展開され彼女の瞳を隠す。

そして二人が激突する大空へと軽くジャンプする。

素早く2発の魔力誘導弾を2人に向けて打ち出す

「なっ！」

予想外の奇襲ではあつたがなんとか誘導弾を撃墜するのとはとフェ
イト

「もう、こんな戦いを見たくはない、だから、私は・・・全力であ
なたたちを止めさせていただきます！」

少女はそう言い放つとまた魔力誘導弾を打ち出す
シールドで応戦するがすぐに破壊されてしまい、2人はなすすべ無
くノックアウト寸前まで追い詰められてしまった。

「どうしてこんなことするの!？」

大きな魔力ダメージを負いながら問いかけるのは

「それは、ジュエルシールドを永遠に封印することが私の責任だから
です!・・・それにもうジュエルシールドのことで誰にも傷ついてほ

しくないから・・・」

その時少女の誘導弾が消えた

「!？」

その一瞬のスキを見逃さなかったフェイトがフォトンランサーを打ち込む

不意を突かれ避けきれなかった少女はHMDゴーグルが破損する。

割れたゴーグルの間だから彼女の悲しみに満ちた目をなのは見逃さなかった。

しかし少女は即座になのは達をバインドで動けなくしてしまった

「悲しい目・・・」

なのは少女がどんな思いでジュエルシードを封印してきたか知るよしもなかったが、彼女がどうして自分たちを止めたかったのかその一部を見た気がした。

「私は、皆さんが生まれるもつと前・・・今ではアルハザードと呼ばれているところにいました。その国はいろいろな種族達が暮らしていました。その中には魔力を持たない者も大勢いて、私はそんな人たちのためにジュエルシードを作ったのです・・・」

しばらく少女のお話におつきあいください

「はじめは、1つだけ願いを叶える物だったのですが・・・おそらく、誰かが変な細工をしたのでしょう・・・年月と共に、願った回数と共に、ジュエルシード自体が持つエネルギーを増幅させてしまふ要になったのです・・・それは、私が干渉できなかったここ数万年のことだと思います。それにジュエルシードという名は私がつけた物ではありません。後で誰かが全く別物もとして広めたときも物です・・・そして、私が一番恐れていたことは、それを使用した後に起こってくる物です」

少女はここで大きな溜息を1つした。

「起こってくる物ですか？」

なのはが恐る恐る聞く

「はい、それは・・・」

UJU

第3話「激突！？3人の魔法少女！」（後書き）

作者「さて、第3話いかがでしたでしょうか？」

淳「俺出てきた？」

作者「出てきたんじゃない？たぶんw」

淳「ホントかな？・・・さて、それは置いておいてUSBメモリをなくすとは間抜けな奴だね君は」

作者「その件に関しましては、読者も皆様に大変ご迷惑をおかけし申し訳ないと思っております」

淳「とりあえずもつと早く投稿してくれよな」

作者「さて次回はずいに明かされる少女の名前とその目的、次回魔法少女リリカルなのは～銀色の戦士～第4話「決戦は時の庭園で？」

┌

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2241k/>

魔法少女リリカルなのは～銀色の戦士～

2010年10月10日07時42分発行